クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ転生者

ひまわり

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日部活の後輩に殺された少年はクレヨンしんちゃんの世界で音無春馬として第２の人生を歩むこととなった。

注意事項

・この作品では映画をメインでやります。
・どの映画を扱うかはアンケートで決めます。
・ヒロインはいます。
・オリ主が関わるため原作は結構改変される場合があります。

・アンケートは計３０票集まるかアンケート開始してから3日経った場合で終了になります。

目次

プロローグ
1話　転生するゾ ―――― 1

プロローグ
1話　転生するゾ

ある日俺は死んだ。自分の死因は何故かハッキリとは覚えていなかったが、これだけは覚えている。誰かと信号待ちをしていた時その誰かに突き飛ばされ道路に飛び出してしまっこと。そして、その瞬間女性の悲鳴が聞こえてきたことを俺は覚えている。

何故死因がハッキリと覚えていないのに、自分が死んだと断言出来たのかそれは今起こっている現象で分かったからだ。

「君は死んでいるのに冷静だね」

俺が目を覚ますとそこはアニメなどによくある知らない病院の天上などではなく、何一つ物が無いただの白い空間だった。そして、目を覚ました俺に金髪の女性が声をかけてきた。女性の名はアリス。自称「神」らしい。

「まぁ、道路に突き飛ばされた時点で俺は死んだって分かるしね」

「ふ～ん、君は結構珍しい子だね」

「そうか？」

「ええ、今まで死んでここにきた子たちに「君は死んだんだ」と告げると全員が取り乱

してたから」

「そりゃまぁ、そうだろう」

普通に考えてそうなるだろう。誰だっていきなり「神」と名乗る人物に「お前は死んだ」って言われれば取り乱すだろう。俺だって死因のことを一つも覚えていなかったら取り乱していたところだ。

こうやってアリスと話しているうちに俺は誰に道路に突き飛ばされたのかを思い出した。俺を道路に突き飛ばした人物の名は「森戸龍斗」俺が所属する美術部の後輩だ。

何故森戸が俺を道路に突き飛ばしたのかその理由も思い出した。その理由は俺が森戸の彼女と喋ったからだ。そうそんな馬鹿みたいな理由で俺は道路に突き飛ばされトラックに轢かれ死んだ。

今思い出すと森戸に対して無性に苛立ちが混み上がってくる。

「・・・・・・で。俺はこれからどうなるんだ?天国に行くのか?それとも地獄に落とされるのか?」

俺は何とか森戸への苛立ちを収め、これからどうなるかアリスに聞いた。

「いいえ、アナタは天国にも地獄にも行きません」

「じゃ、何処に行くんだ?まさか、俺を生き返らせてでもくれるのか?」

「ええ、そうですよ」

「マジかよ・・・・・・」
アリスの答えは「どちらでも無かった」。俺はその答えを聞き冗談半分で「生き返らせてでもくれるのか?」と聞いてみるとアリスは「そうですよ」と答えた。まさかの答えに俺は驚愕してしまった。
「実はこの空間で目を覚ました人は違う世界に転生することになっているんです」
「違う世界?それは、今まで俺が生きていた世界ではない別の世界ってことか?」
「えぇ、現実世界で生き返らせてしまったら混乱が起きてしまうので」
「まぁ、そうなるよな、普通は」
どうやら、アリスが言うには俺は現実世界では無く別の世界で生き返るらしい。まぁ、普通に考えて即死した状態の人が突如生き返ったら親なんかショックでショック死してしまうだろう。
「で、俺はどこの世界で生き返らせてくれるんだ?」
「アナタが生き返る世界は「クレヨンしんちゃん」の世界よ」
「く・・・・・・クレヨンしんちゃんの世界」
俺はアリスにどこの世界で生き返るのか聞いた。アリスは「クレヨンしんちゃん」の世界と答えた。
俺が生き返ることになったクレヨンしんちゃんの世界とは１９９２年４月１３日か

ら始まったら国民的人気アニメの一つだ。
クレヨンしんちゃんの内容は埼玉県春日部市に住んでいるマイペースな5歳児野原しんのすけに、両親をはじめ周囲の人たちが振り回される日常を描いたアニメである。
「ん？何か不満でもあるのですか？」
「いや、不満ってかクレヨンしんちゃんの世界って結構危ないじゃん」
クレヨンしんちゃんの世界は基本的日常を描いたアニメであるが、映画では基本的危ないことが多いのだ。そのため普通の人間がそんな世界に転生すればまぁまぁ命の危機に陥ってしまう可能性があるのだ。
「確かにそうですね。しかし、そんな心配は入りません。アナタには転生特典ガチャというものが引けるので」
アリスはそう言い指をパチンと鳴らすと、天上から石で出来たガチャガチャが落ちてきた。どうやら、これが転生特典ガチャらしい。
「で、このガチャは何回引けるんだ？」
「えーと、アナタは人に殺されたのが原因なので特別に5回ガチャ引けますよ」
「へぇー、そんなに引けるんだ」
「えぇ、ですが、ガチャ率は悪いですよ」
俺は死んだ理由が人に殺されたという理由なため、5回も転生特典ガチャを引けるら

しい。これは森戸に感謝だな。まぁアリスが言うにはこの転生特典ガチャはガチャ率が悪いらしい。

「まぁ、いいよ。取り敢えず5回引けばいいんだな」

俺はそう言い転生特典ガチャを回し始めた。

「5回引き終わりましたね」

「あぁ」

「では、カプセルの中身を発表しますね」

「あぁ」

俺は転生特典ガチャを引き終わると、アリスは俺が出したカプセルを開けその中に入ってある中身を発表し始めた。

「まず、1つ目視力が5．0になる。2つ目は嗅覚が今の3倍になる。3つ目は驚異的な握力になる。4つ目は身体が丈夫になる。5つ目は運動神経が今の3倍になる」

「・・・・・・まぁ、いい方かな」

ガチャの結果はとてもいいとは言い難いが結構いい特典を引いたと俺は思う。特に驚異的な握力になると運動神経が今の3倍になるは結構いい特典だと思う。

「さて、これからアナタをクレヨンしんちゃんの世界に転生させますね」

「あぁ、分かった・・・・・・・・って、おい、アリスはその手に持ったバットはなんだ？」

「実は結構後がつかえているため、こんな雑なやり方になってしまうですよ。申し訳ありません」

アリスはそう言い手に持った金属バットを俺の頭部目掛けてフルスイングした。俺はそのまま倒れ込み意識を失う中こう呟いた。

「覚えとけよ、この駄目神が」